《論説・動向》

私見：概説書をどう書くか、概説書のなかでどう書くか
――『はじめて学ぶフランスの歴史と文化』編集の経験から――

上垣　豊

はじめに

『フェネストラ』への執筆の機会を与えられたのを利用して、概説書での執筆の仕方について私見を述べることにしたい。卒業論文の書き方など、論文やレポートの書き方について書かれた文献はずいぶんあるが、概説書、入門書での書き方について書かれたものは管見の限りでは見当たらない。入門書は、すでに業績のある研究者がその専門分野の学識を活かして執筆するものであるから、あらためて、その手順、技法などを定式化する必要はない、とでも考えられているのであろう。

だが、モノグラフィーと概説書では目的、対象とする読者が異なり、おのずと書き方も変わってくるはずである。また、単著で概説書を書いたり、編者になったりする機会はそれほど多くなく、ある程度年齢が上がらないとないだろうが、概説書の分担執筆となれば、かなり多くの研究者が、しかも比較的若い頃から経験することになるだろう。そもそも、その学識を学生や一般の人々に広め、伝えることは大学教員の社会的使命のひとつである。今日では、公共史というジャンルが近年では強調されてきている。概説書、入門書を執筆する能力の開発は、FD 同様に、あるいは FD の一環として、もっと検討されてしかるべきであろう。

ちょうどこの 3 月末に私が編集したフランス史の概説書が出版されることになった。新しく出た本の宣伝もかねて、この本の編集の経験を紹介しながら、概説書の執筆にあたって私が留意していることを書いてみることにしたい。

1.『はじめて学ぶフランスの歴史と文化』の編集

ミネルヴァ書房の編集者の岡崎麻優子さんから私に、フランス史の新しい概説書、『はじめて学ぶフランスの歴史と文化』（以下「フランス篇」と略）の企画の依頼があったのは 2017 年 10 月であった。その時は正直、「また教科書か」と驚いた。というのはミネルヴァ書房からは、服部春彦・谷川稔編『フランス近代史』（1993 年）、谷川稔・渡辺和行編『近代フランスの歴史』（2006 年）、杉本淑彦・竹中幸史編『教養のフランス近現代史』（2015 年）と三冊のフランス史の概説書がすでに出ており、剣持久木さんと平野千果子さんがそれぞ

れ編者となって二種類のフランス史の教科書の出版が準備されている、と仄聞していたからである[1]。

それでもしばらく考えて引き受けることにした。一つにはフランス史の研究者に執筆機会を作ることと、他方ではフランス史の概説書を編集する機会は二度とないであろうと思ったからである。まず岡崎さんに頼んで先行する二つの企画の執筆予定者一覧をいただいた。出版予定の二つの書を含め、杉本淑彦・竹中幸史編以降の三つの書と執筆者がだぶらないようにしたかったのだが、結局、角田奈歩さんと中村督さんの二人が重なり、最後には竹中幸史さんにまで頼ることになった。

執筆者を選ぶにあたっては、概説書、入門書の新しい書き手を作ることも考慮した。歴史学に限らず、文学、美術史、音楽、言語学、映画などと専門分野も多様で、原聖先生のような大家、松嶌明男さんのようにすでに単著の入門書を書かれている方から若手まで、研究者としてのキャリアも幅広い。とくに意識したわけではないが、女性の研究者が 18 名中、9 名と半分を占めることになった。また、執筆者はほとんどが関西フランス史研究会の例会で報告していただいた方である。

『はじめて学ぶ歴史と文化』のシリーズは指昭博さん篇のイギリス篇（2012 年）と藤内哲也さん篇のイタリア篇（2016 年）が出版されており、構成と執筆要綱はイギリス篇に基づき、執筆要綱には、近年の大学教育の変化を意識して、次のように書いておいた。

> 章の本文は、本を読み上げて、それを補足的に少し詳しく解説する形で、実際の授業で活用できるようにし、コラムは、自学自習用に 600 字～800 字程度で学生に要約させてミニレポートを書かせる題材にしたいと考えています。・・・章の本文では、読み上げても不自然ではないように、少し短めに一文をまとめてください。コラムは、ミニレポートの題材のほかに、授業時間外における予・復習用のテキストとしての利用を想定しています。

このシリーズは、コラムが中心になっているのが特徴である。「フランス篇」でも、章の本文は終章を除いて、各章 400 字詰×30 枚（図・表類も枚数に含める）、歴史の扉（1 テーマコラム）20 枚とした。コラムの数が 16 と多く、字数も 20 枚とコラムとしては長い。

コラムのテーマについては、編集の岡崎さんの要望を入れて、彼女が読みたいものを作るということで臨んだ。こうして美術、音楽、食文化、映画、モード、余暇など、フランス文化といえばすぐに浮かんできそうなテーマが取り上げられることになった。その他、宗教政策など、章本文と独立して論じておいたほうが良いテーマを付け加えることにした。コラムの執筆者にはイギリス篇のコラムのなかで分かりやすく、要約しやすいものを選んで PDF にして執筆者に送った。

---

[1] 剣持さんが編集された『よくわかるフランス近現代史』は 2018 年に、平野さんが編集された『新しく学ぶフランス史』は 2019 年 11 月に、それぞれ出版されている。

章の本文でも文化史の比重をこれまでの概説に比べると高めるようにお願いした。コラムが中心とはいえ、私の担当以外の章はなかなか力作である。少ない字数の中で書くのであるから、章本文の執筆者はかなり苦労されたことと思う。特に中世を担当していただいた図師宣忠さんにはわずか60枚で1,000年の歴史を書くという無理を強いることになった。

歴史学以外の専門分野の方であるが、本を献呈した方からいただいた感想の中に、フランス史に関する書籍は通史か文化史に偏る傾向があったので、両者がバランスよく書かれている、という趣旨のものがあった。これまでの日本におけるフランス史研究への批判も感じられるが、同時に文化史を組み込んだ概説書に需要があることを示しているように思う。

2. 文化史と通史をどう結びつけるか

ここからは私の執筆部分をどう書いたのかを述べておきたい。本を献呈した方からお返事を頂いた方のなかには、私が一人で章本文のかなりの部分を書いていることに驚かれた人が何人かおられた。実は、ひな型にしたイギリス篇では指さんが一人で章本文をすべて書いているのである。フランス篇では、私が下書きして竹中幸史さんに加筆訂正していただいた第 5 章を含めて、結果的に全体の半分以上書くことになった。こうなったのは、近現代では適当な執筆者が見つからなかったのが大きな理由であるが、コラムが充実しているので近現代の章本文は簡略化が可能で、やり方次第では一人でも書けそうであったのと、執筆者を増やすと遅延が生じるおそれがあったためでもある。

私の担当章については、コラムとコラムの間をつなぐようにして書き、近現代の政治史の詳細は既存の概説書にゆずり、思い切ってカットすることにした。まとまりをつけるために、教育社会史の研究成果をそれぞれの章に盛り込んでいけば一貫性が出てくるのではないかと考えた。その一環として、人名を出す場合は、その人物の教育歴をなるべく入れてみることにした。教育歴は、個人と社会、あるいは国家との結びつきを示すことができるという利点がある。様々な思想・文化に言及しているが、相互の関連や、歴史的位相、そして知識人、文化人の知的交流、または交流の場を描くことを主眼とした。

また、平野さんが編集される教科書では、対外的な側面、植民地、海外領土が重視され、斬新な内容になることが予想され（実際にも、そうであったのだが)、それに比して従来通りの一国史的な印象を与えることは否めなかった。そこで、フランス文化の国際的な地位や外国文化の影響についてなるべく触れるように努めることにした。

本書全体を通じて、人名、地名など固有名詞はなるべく減らすのを原則としたが、私の担当章では文学者、作家については翻訳があって名前が知られている人物に限定し、1 回出てきた場合は複数回登場させるように努めた。結局、サルトルは中村督さんが担当したコラムで出てきた箇所を含めて 9 箇所で登場している。フランスの知識人、文化人は専門と

いう蛸壺の中に閉じこもっておらず、政治や社会に参加し、他の学問・芸術分野と活発に交流していることがわかるようにしたかったのである。

次に私が執筆した章の本文で主に参照したフランス語の参考文献を下記に挙げておく。

A : Christophe Charle et Laurent Jeanpierre (dir.), *La vie intellectuelle en France*, 2 tomes, Paris, Seuil, 2016.

B : Pascale Goetschel et Emmanuel Loyer, *Histoire culturelle de la France : De la Belle Epoque à nos jours*, Paris, Armand Colin, 1994, 5e édition, 2018.

C : Jean-Pierre Roux et Jean-Fraçois Sirinelli (dir.), *Histoire culturelle de la France*, t. 3 et t. 4, Paris, Seuil, 1998.

A のタイトルは直訳すれば「フランスにおける知的生活」となる。政治や宗教などあらゆる領域の思想、自然科学を含めた学術文化、芸術をカヴァーし、総勢 130 名近くの執筆者、二巻本で総ページ数 1,500 頁を超え、フランスの学界の底力を感じさせる大作である。ロング・デュレのアプローチで思想の生産・交流の場、思想の国際的流布、地域的な要素、思想の生成の集団的・制度的基盤に注意を払っている点が特徴である[2]。各部の最初の章は政治史との関連で通史的な叙述が施されているが、レベルが高く、初心者向けではない。全体の枠組みや、歴史認識、個々の思想の評価は基本的にこの大著に負うことになった。

文献 B は学士課程と修士課程用の参考書である。総ページ数も 385 頁とおさえられている。時期的には第三共和政以降を扱っており、A では省かれている通史的な記述、基礎的な史実が充実している。学術についても詳しいが、A と比べて大衆文化や一般のフランス人の文化実践に関する記述が多いのが特徴である。ただし、学生、院生向けの参考書であるのにもかかわらず、ケアレスミスが散見されるのが惜しまれる。

文献 C は、全四巻からなるフランス文化史の通史の後半の二巻である。特に美術史を通史とうまくミックスさせているのが特徴で、一般読者向けに平易に叙述されていて読んでいて楽しい書物であり、叙述の仕方では大変参考になった。Françoise Mélanio が執筆した第三巻の後半部分は、増補されて、*Naissance et affirmation d'une culture nationale : La France de 1815 à 1880* （『国民文化の誕生と確立 ：1815 年から 1880 年までのフランス』）というタイトルで文庫本として出版されている。

三つの文献を詳しく説明する紙幅はないが、一点だけ述べておきたい。文献 A と C での時期区分は、次のように、政治史を中心とする通史とは異なっているのである。

A : フランス革命直後～1860 年頃、1860 年～1914 年、1914 年～1962 年、1962 年～

[2] 文献 A の内容に基づいて、編者の一人クリストフ・シャルルが 2017 年 2 月に東京日仏学館において、講演している。講演の内容は白鳥義彦さんの翻訳で、『日仏教育学会年報』第 27 号（2020 年秋刊行予定）に掲載予定となっている。

C : 1715 年～1815 年、1815 年～1880 年、1885 年～1918 年、1918 年～1962 年、1960 年代～現在

A では、第三共和政成立（1870 年）ではなく、1860 年が区切りとされ、1958 年の第五共和政成立ではなく、アルジェリア戦争終結の 1962 年が画期とされている。C でも、1870 年ではなく、1880 年が区分の年とされ、A と同様、1962 年で時期区分されている。どちらの場合も、通史で採用される政治体制の変更による区分とのずれが生じている。残念ながら、「フランス篇」では、A あるいは C で行われている時期区分を採用することができなかったが、文化史を書く上では留意しておくべき課題であろう。

3. 概説書のなかでどう書くか

概説書や教科書の分担執筆を頼まれた場合、必ずしも直接の専門ではないことを主題にすることがおこる。むしろ、直接研究していることを書けることのほうが稀であろう。以下に述べるのは、あくまでも私の執筆方法であるが、参考になれば幸いである。

最初に参考文献を集める。邦語文献はもちろん、欧文で書かれた通史、概説書、とくに学生・院生向けの参考書・教科書をまず入手することが大事である。フランス史の場合は、学士課程や中等教員試験用の良い教科書が出ている。邦語文献は一通り目を通し、欧文の参考書と対比して、邦語の概説書では何が書かれていないのかを前もって確認しておくことにしている。概説書とはいっても専門の研究者も読むことになるから、彼らがあまり知らないことを欧文の参考文献のなかから一つか二つ探しておく必要があるからである。谷口良生さんが執筆したコラムのように、テーマに引き付けて自分の研究を利用して、新味を出すのも一つの方法であろう。

次に、大雑把な項目（小見出し）を立てて、そこに複数の参考文献のなかから関連する内容のものを書き出す。同じ事件に関しても、参考文献によって微妙に異なる記述がされているものである。この段階では、筋道のたった文章にせずに、同じ項目に関する異なる記述を並べておくだけにしている。初稿は決められた字数の二倍から三倍程度書き、そこからすこしずつ字数を削って文章のまとまりをつけていく作業に入る。

小見出しを途中で変更するのはいとわない。途中で小見出しの分割、統合もこだわらずにおこなう。私の場合は、最初の構成とすっかり変わってくる場合がむしろ多い。私の場合は、仕上げの段階で、小見出しは 400 字詰め原稿用紙で 3 枚、1200 字程度に一つついているように分量を調整している。

続いて、具体的な記述あるいは叙述での工夫について、述べておこう。レトリック（修辞学）に属する事柄である。レトリックには学問分野を超えて適用可能なものもあるが、ここでは歴史学研究者の強みを活かした記述あるいは叙述方法について考えてみたい。

日本語の文章を書くのは、文学研究者は上手である。だが、歴史学を専門としていない研究者の場合、私の印象であるが、一般にクロノロジーに沿って、あるいはクロノロジーを意識して叙述するのは意外に苦手である。逆にいえば、年代をうまく活用して叙述すれば、歴史研究者の強みを活かした文章が書けるのではないかと考えている。

学識を活かした方法をいくつか挙げてみよう。最初の例は、長期にみた場合の意義を述べる方法がある。

> カペー朝は、傍系王朝のヴァロワ王朝およびブルボン朝に引き継がれ、その系統はフランス革命にまで続くことになる。（図師さん担当の第 1 章、p. 6、以下引用はすべて「フランス篇」から。）

次の例は現代に引き寄せて述べる、あるいは現代的な意義を示すものである。

> 一票を投じて自らの未来を託すという政治文化は、こうして始まったのである。（竹中さん担当第 6 章、p135.）

現代人の見方を過去に投影するために生じる誤解、形を変えたアナクロニズムを指摘する。

> 1492 年のコロンブスによる新大陸発見や 1534 年に始まるジャック・カルチエによるカナダ探検も、同時代のフランス人にとっては、現代人が思うほどには大きな衝撃をうけるものではなかったようである。（小山啓子さん担当の第 3 章、p56.）

また、同じ時期に起こっている二つの異なる事件を結びつけることによって、歴史認識を問い直す方法もある。次の箇所を読むと、コルベールの印象も変わってくるであろう。

> コルベールは…財務総監に就任する 1665 年の前年には、文化政策の責任者である建築長官に任命されている。（嶋中博章さん担当の第 4 章、pp87-88.）

以上はかなりの学識を必要とする例であるが、次に、もっと簡便に活用できる年代を使った記述（修辞）の方法を挙げておこう。

同じ系列の事柄を時系列に沿って並べる。私の執筆箇所から一例を挙げておこう。

> パリで 1855 年、67 年、78 年、89 年、1900 年と何度も開催される万国博覧会は何百万もの入場者を引き寄せ、大量のポスター、絵葉書、ガイドブック、アルバムの出版をもたらした。（p190.）

同時期に起こったものを列挙する方法もある。次はその一例である。

> 文学・芸術の分野では、1855 年にネルヴァル、56 年にはハイネが、その翌年にはアルフレッド・ミュッセが死去し、ロマン主義の時代は終わろうとしていた。（pp165-166.）

これらは年代を効果的に活用する方法の一部にすぎない。

ただし、年代などの細かい数字を入れると、思わぬ勘違いやケアレスミスも起こりやすい。歴史研究者にとって宿命のようなものであるが、自戒しておかなければならない。

歴史学は総合の学問であるから、文化に関する事柄も政治、社会、経済と結びつけた叙述を心がけるべきであろう。だが、定められた字数の中で全体像を正確に書くのはそれほど簡単なことではない。今のところ、良いアイデアが思いつかないが、解決策を考えておく必要があるだろう。

まとめに代えて

雑駁に書き連ねてきたが、ここで書いたのは、あくまでも個人的な経験に基づいた、書き方の一つの例にすぎない。この程度のことならば、すでに実際に行っているという人も多いかもしれない。しかしながら、無意識的にあるいは経験的に行っていることと、それを定式化して、意識して用いることとは別のことである。また、文章の書き方は大家が書いた歴史の名著を読んで勉強すればよい、という意見もあるだろう。だが、大家の文章を読むだけで、名文家になることができるのであれば苦労しないわけである。大家の名文のテクスト分析を含めて、概説書、入門書でのエクリチュールの研究が必要となるだろう。

本稿を執筆している間も、二冊、西洋関係の入門書をいただいた。「フランス篇」とはまた異なるタイプの入門書である。COVID-19 の感染拡大で全く先が見えなくなったが、苦境が続く出版業界の中にあって、概説書、教科書の出版需要はそれでもまだ続くであろう。各種の概説書、入門書の比較検討とともに、概説書や一般読者向けの書物を執筆する能力の向上、さらに研究者の分業化が求められてくるのではないか。この小稿が議論のきっかけになれば幸いである。

（龍谷大学教授）